

2018年7月21日

自然を語る会報告

日比谷図書文化館 セミナールーム B

参加者 13名

担当者 岩渕さん

今日はポール・ブルックス著『レイチェル・カーソン』の19章のうち、「別の道」と「自然のバランス」だった。

「別の道」では、最初にロバート・フロストの詩について触れられているが、これは、原題が“The Road Not Taken”という詩だそう。道を歩いていると、二つに分かれている、どちらの道を取ろうか・・・こちらを歩いて行っただが、もし向こうの道を歩いて行ったら、もっと違う人生だったのだろうか、という内容の詩らしい。この詩の場合には、どちらの道を通っても良いわけだが、レイチェルの場合は、二つの道のどちらでもよいというわけではない。一つは偽りの道で、ハイウェイを猛スピードで突っ走ることができるように思えるが、実際は破滅への道と向かっている。もう一つの道、人があまり通らない道だがその道を通るときだけ最終目標に至ることができる、という。間違えずにこちらの道を進まなくてはならないのだ。

化学薬品に変わる防除の方法（別の道）として、ここでは生物防除の可能性について述べられている。実際に成功した例はあるのだろうかという質問が出た。それに対して、戦前の話だが、リンゴの害虫のリンゴワタムシの天敵を求めて、上遠さんのお父様がアメリカのオレゴン州に行かれた話が披露された。リンゴワタムシの天敵は、リンゴワタムシヤドリコバチという体長1mmくらいの寄生バチだそう。寄生されたワタムシがついたリンゴの枝を数本、筒状の箱に入れシアトル港から横浜港まで船内では冷蔵室に入れてもらった。横浜には青森から技師が来て持ち帰り繁殖を試みたが、その冬を越せたハチは20頭に過ぎなかったが、そこから繁殖を続けた。戦後、戦争の混乱で管理も行き届かなかったはずなのに、ワタムシの被害を受けたリンゴの木は1本もなかったそう。天敵を利用しているわけではないが、桜の害虫のコスカシバの例も挙げられた。コスカシバは幼虫が幹に穴をあけ、桜を枯らしてしまう蛾である。高尾森林科学園はサクラ保存林を有し、この蛾に悩まされていた。コスカシバの雌が雄を呼ぶフェロモンと似たものを合成してチューブに入れ、桜の枝につけて放散するようにしたところ、雄が混乱して交尾できず、虫による害が劇的に減ったという。生物防除はうまく利用すれば非常に有効であることがわかった。

「自然のバランス」では、生きものの個体数は環境抵抗（食料の量、気候、競争相手や捕食者）によって規定されているということだった。生きものたちはお互いの攻防によって、一つの生物が爆発的に繁殖することを防いでいるのだということが話された。

読書会のあと、文京区の動坂公園で花壇の野の花再生をしている A さんから、草刈りをしなくなってからいろいろな花が現れ、セミや野鳥も増えてきたという報告があった。新たに現れた生きものに出会うワクワク感、これこそがセンス・オブ・ワンダーの神髄だろうという明るい話だった。

(文責：小川)

